

# 序

2004年から卒後臨床研修必修化が始まった。厚生労働省が定めた到達目標によると、皮膚縫合・局所麻酔は「Ⅱ 経験目標 A. 経験すべき診察法・検査・技術 (4) 基本的手技」に定められており、経験のみでなく習得も望まれる手技の1つになっている。

従来、若い外科医・研修医が外来で日常的に遭遇する小さな創傷に対する外科的な対処は、目の前にいる外傷患者に対して局所麻酔・出血のコントロール・汚染創の処置をして、外来小手術用の適切な器具や針・糸を選んで縫合をするという一連の操作が緊急に行われていた。そのため、これらの一連の操作を系統的に教えるというよりも、実際の現場において指導医が行う処置を見よう見まねで覚えてゆくのが常であった。しかし、若い外科医・研修医がそのようにして臨床の現場で実地に体験したことを、書物によって再確認することがその処置法の習得をより確実なものにする。

しかし、残念ながら分かりやすい解説書は少なかった。羊土社が実施したアンケートにおいても、縫合・局所麻酔に関する分かりやすい解説書を希望する声が多数寄せられている。そこで本書は若い外科医・研修医を対象として、実際の写真やイラストを多用して系統的で分かりやすい内容を目指し、大学病院で医学生・研修医の教育に軸足をおいている外科医（清水先生）と、新しい創傷治療理論に基づいた治療法を実践している形成外科医（吉本先生）が中心となって企画・作成したものである。外来の小外科に対応する若い外科医・研修医に必須の好著となった。

2009年3月

千葉大学名誉教授，三愛記念そが病院消化器病センター長  
落合武徳